

「女子力」を求める社会

— 雑誌記事分析を通して見た「女子力」の構造 —

田口 さくら

本論文の目的は、「女子力」という言葉がもつ「力」や「構造」を問うことにより、女性が身に着けるべきものとして、安野モヨコによって作られた「女子力」を社会がどのように捉えていったのかを明らかにすることである。具体的には、「女子力」誕生以前から存在している、「女子力」と類似した価値観「かわいい」との関係性をみていく。そして、「女子力」が社会に普及した要因を「ポスト近代型能力」や「恋愛」から探り、それらの要因がどのように機能しているのかを「女子力」がタイトルに含まれている雑誌記事(以下、「女子力」記事)分析と照らし合わせる。

結果的に、「女子力」の誕生時と現在の雑誌上での状況を比較したところ、「女子力」は曖昧な定義のまま様々な意味づけがなされていき、同時に、「女子力」UP の方法も多岐に渡っていったことがわかった。だからこそ、その後は次第に雑誌における「女子力」UP を促す記事が極端に減少していき、「女子力」記事自体も作成されることは少なくなっている。

また、「女子力男子」の登場により、「女子力」を扱う主体に女性だけでなく男性が含まれることで、「女子力」を「武器」として捉える記事が目立っていく。しかし、男性にとって「女子力」は「武器」になっても、女性にとって「女子力」は「備わっていると期待される基礎的な能力」であり、「武器」と切り離して捉えられない部分がある。

一方で、「女子力」を批判する記事も登場してくるが、そこで提示される「やるべきこと」は、他誌における「女子力」UP の内容と同様である。2014 年前まで、主にファッション誌やライフスタイル誌、健康情報誌から「女子力」UP 方法が多数示されていったからこそ、雑誌が指南する「すべて」が「女子力」UP 方法と類似する状態になっている。

「女子力」という言葉を使ったセクハラ・パワハラによって女性社員が自殺した事件や「女子力」への批判的な意見を特集した新聞記事が特集される現代社会では、「女子力」に対するイメージが否定的なものになっていってもおかしくない。先行研究においても、「女子力」は「良妻賢母

を助長するものである」など批判的な見方が多い。

それにも関わらず、現在もなお「女子力」が様々な場で使用されている状況は、「女子力」という旧来的であり不自由を強いるジェンダー規範といえるものが社会における一つの指針として機能し続けているのである。